

不換銀行券・物価の論争問題

飯川

飯田 繁 著

不換銀行券・物価の論争問題

千倉書房

著者紹介

- 1906年 鹿児島県に生まれる。
- 1930年 東京大学経済学部経済学科卒。大阪商科大学教授、大阪市立大学経済学部教授(経済学博士)、同経済学部長を経て、
- 1970年 大阪市立大学名誉教授・岐阜経済大学教授となる。この間、日本学術会議会員(第8,9期)を務める。岐阜経済大学学長(1972~81年)を経て、
現在、岐阜経済大学教授。専攻は金融論・物価論。
著書『最近の物価政策と景気』(1936年、大阪商科大学経済研究所)
『物価の理論的研究』(1949年、伊藤書店)
『利子つき資本の理論』(1954年、日本評論新社、新訂、1958年)
『利子つき資本』(1959年、有斐閣)
『現代銀行券の基礎理論』(1962年、千倉書房)
『兌換銀行券と不換銀行券』(1963年、千倉書房)
『インフレーションの理論』(1968年、日本評論社)
『マルクス紙幣理論の体系』(1970年、日本評論社)
『商品と貨幣と資本』(1981年、ミネルヴァ書房)
『マルクス貨幣理論の研究』(1982年、新評論)
『貨幣・物価の経済理論』(1983年、新評論)
編著『インフレと金融の経済学』(1979年、ミネルヴァ書房)

『不換銀行券・物価の論争問題』

昭和58年5月15日 印刷

昭和58年5月25日 発行

659 芦屋市平田町 2-8-306

検印
省略

著作者 © ^い飯 ^だ田 ^{しげる}繁

東京都中央区京橋 2-4-12

発行者 千倉悦子

東京都港区六本木 3-6-9

印刷者 日成エンタープライズ

104 東京都中央区京橋2-4-12 京橋第一生命ビル

発行所 千倉書房

TEL.03(273)3931 (代) 振替・東京2-978

ISBN4-8051-0456-2

序 文

——不換銀行券論争の足跡——

『現代の貨幣・物価問題』をあきらかにするためには、いま国内でげんに流通している不換銀行券と物価との經濟關係をわれわれは追究しなければならない。それには、まず不換銀行券とはなにか、それはどんな動きかたをし、さらにまた物価とどう関連するのか、つまり、不換銀行券の本質・運動と物価變動との關係をめぐる諸問題の理論的・現実的な説明がとめられる。

もうひとつ突っこんでいうと、不換銀行券はかつての兌換銀行券を否定してあらわれた現代の貨幣代用物なのだから、現代銀行券としての不換銀行券の本質・運動を知るためには、まずそれに先だつ、基盤としての兌換銀行券の本質・運動をしっかりとつかまえないければならないことになる。こうして、純粹・完全な姿の兌換銀行券を全面的に否定する純粹・完全な姿の不換銀行券の本質・運動問題をめぐってまきおこつた論争・いわゆる『不換銀行券論争』は、同時にまた、さかのぼる『兌換銀行券論争』でもあった。このことは、なにも不換銀行券と兌換銀行券の無差別性をいみするものではない。それなのに、論争の種まき人である岡橋保教授は、兌換・不換のちがいはとらわれない『信用貨幣』説の立場から、好んで包括的な『銀行券論争』という独特な自家用製の造語を愛用される。ところが、教授の明言どおりに、論争はまさに銀行券いっばん、いやさらにひろく、貨幣・代用貨幣の全域にまで波及している、ともいえよう。

1 序 文

不換銀行券は、たしかに兌換銀行券と共通する次元の一面をもつてはいる。それは、しかし貨幣論の段階ではなく、資本論・信用論（擬制的利子つき資本論・銀行信用論）の段階である。兌換銀行券も不換銀行券も、ともに主体としての

中央銀行から割引・貸付発行される銀行券（商業手形とは区別される銀行手形）なのだから。その共通性は、だから、あくまでも資本論・銀行信用論段階的な本質・運動にかんするのであって、貨幣論段階的な本質・運動にかかわるものではない。貨幣論段階的な本質・運動のうえでは、兌換銀行券と不換銀行券とは、信用貨幣性と価値表章性として対立する。本質・運動のうえでそれぞれにみられる兌換銀行券の二重性と、不換銀行券の二重性——擬制的利子つき資本性の同一性と、代用貨幣（信用貨幣性と価値表章性）の差異性——が、理論的・現実的に説明されなければ、両者の同一性と差異性との複雑・多岐な諸関係はとらえられないことになる。不換銀行券の本質・運動を兌換銀行券のそれらとおなじ信用貨幣性のなかにみようとすると単純・素朴な構想は、しよせん資本論段階と貨幣論段階との混同・無差別論に起因するのだろう。

したがって、不換銀行券論の解明のためには、貨幣論段階の問題だけでなく、信用論・資本論段階の問題もまた研究対象とされなければならない。それでもなお、先行しなければならないのは、貨幣論段階の問題である。そこで、いま、不換銀行券の貨幣論段階の規定について、先どりのひとこと。

不換銀行券が価値表章性の代用貨幣であることを立証するためには、まず不換銀行券が、貨幣の流通手段機能の超過性・象徴性・強制通用力の行使・一般的流通性の単純な直行路線をたどったかつての価値表章性の不換（国家）紙幣とはちがひ、貨幣の支払手段機能から発生した信用貨幣性の代用貨幣（商業手形→兌換銀行券）を否定しながら、強制通用力・一般流通性に裏づけられてようやく登場する紆余曲折ものであることを認識しなければならない。

そしてまた、現代的価値表章としての不換銀行券が、もっぱら、「紙幣流通の独自の一法則」に支配されて運動するという点では、貨幣の流通手段機能から原始的・直行的に発生した古典的価値表章性の不換紙幣と基本的にはなにもちがわぬことを、まず基礎理論的に確認しなければならない。そのためには、「紙幣流通の独自の一法則」の前提・背景・基礎となる流通必要量を規定するところの、「貨幣流通の諸法則」が価値表章の運動にたいしてもつ関係（支配か、反映か）を、だいいちに正しく把握することだ。不換銀行券の貨幣論段階的な本質・運動にかんする論争が、兌

換銀行券の貨幣論段階的な本質・運動をとりまく論争にまで、したがってまた、〃紙幣流通の独自の一法則〃の支配をめぐる論争が、〃貨幣流通の諸法則〃の支配・反映にかかわる論争にまでさかのぼって展開されたわけは、これらにかんする対立的な基礎構造視点に改めて精密検査を要する諸謬論・病根が底深くひそんでいる、とそれぞれの立場が判定したからであった。

多数の論者が参加し、長年にわたって築き・残してきた不換銀行券論争の足跡には、その意味で、一方では研究の進捗をはばむ、原典の無用な対立的解釈論のくりかえしや、対立論にたいする誤解などのデメリットがみられたものの、他方では問題の深底に多角的なメスを入れて新たな研究テーマの探索をうながし、学問視界の進展に寄与したメリットもみられたのではなからうか。それにまた、論争者たちにとっては、おたがいが研究上の〃他山の石〃・〃反面教師〃として役だったのではなからうか。論争のメリットが一般にそうであるように。とはいっても、不換銀行券論争がおわったわけではない。学問の高峰はつらなる。論者はつぎつぎに世代交替しても、論争内容はひきつがれ、深化されるだろうし、その正否はいずれかに結着しなければならぬだろう。

本書の第一部では、〃不換銀行券の運動と物価の変動〃の基礎構造にかんする岡橋説の検討が主題となっている。そのなかの第一章は、岡橋説批判の立場を序説的にあきらかにするため新たに執筆されたものである。第二・第三章では、岡橋保教授が〃不換銀行券〃信用貨幣説の論理をおしとおすために強引に工作されたらしい、〃貨幣流通の諸法則〃・〃紙幣流通の独自の一法則〃の歪曲・謬論——関連する諸異説——が検討される。つづく第二部は、論点を〃不換銀行券の伸縮性〃にしぼる。〃不換銀行券〃信用貨幣説の一支柱とされている〃不換銀行券の伸縮性〃は、貨幣論的視点ではなく、利子つき資本的視野で解かれなければならないのに、同説には残念ながら、そのことにたいする正しい理解が欠けている。

これまでのわたくしの論争文がそうであったように、本書でも論争のおもな標的は岡橋説である。わたくしは、畏友・岡橋保教授からこうしてうけた学恩に心から感謝する。もし、岡橋教授が特異な構想をもっていちずに先頭をき

って猛進されなかつたならば、わたくしは、マルクスの原典をいく度も読みかえし、経済実態をふまえながら岡橋説に挑む幸運にはめぐまれなかつたことだろうから。

本書は、昭和三〇年代にはじまった「不換銀行券論争」の初期拙論集・『現代銀行券の基礎理論——現代銀行券の研究（第一巻）——』、『兌換銀行券と不換銀行券——現代銀行券の研究（第二巻）——』につづく論集である。さいしよに想定していた『不換銀行券と物価——現代銀行券の研究（第三巻）——』という題名を、わたくしは『不換銀行券・物価の論争問題』に改めた。その後の論争にかかわる諸点は、『インフレーションの理論』・『マルクス紙幣理論の体系』・『商品と貨幣と資本』・『マルクス貨幣理論の研究』・『貨幣・物価の経済理論』のなかにも散在している。これらは、本書がはらむもろもろの関連難題を解きほぐすことにそれぞれすこしながらも役だつたろう。

本書の出版を、わたくしは二〇年まえの拙著『現代銀行券の基礎理論』・『兌換銀行券と不換銀行券』（ともに千倉書房刊）のあちら・こちらのページに、浅はかにもれいれいしく予告していた。本書のおもな内容は、「あとがき」にみられるように、二〇年ほどまえにおおかた書きあげてはいたものの、出版のあまりのおくれに痛く恥じ入る。そのおくれを寛大におゆるしくくださった千倉書房の千倉孝代表取締役はじめ、秋本敬助編集部長、その他のかたがたのご厚情に深謝する。

一九八三・四・一

飯 田 繁

目次

序 文——不換銀行券論争の足跡——

第一部 不換銀行券の運動と物価の変動……………一

第一章 不換銀行券と物価との経済関係——不換銀行券論争を顧みて——……………一

はじめに……………一

I 貨幣と物価との因果関係……………五

1 貨幣価値と商品価格（↓物価）……………六

2 物価と貨幣数量——インフレーションと貨幣数量説——……………二

II 不換銀行券とインフレーション……………七

1 //貨幣流通の諸法則——支配と反映——……………八

2 //紙幣流通の独自の「法則」の支配……………二六

A 不換紙幣と不換銀行券——「本質と運動」の概論——……………二六

B 不換銀行券の二重本質と二重運動——貨幣性と資本性、非伸縮性と伸縮性——……………三三

C	不換銀行券インフレの可能性（非必然性）——民需と国需——	三六
D	インフレ構造の抽象と具体——回顧と展望——	三九
第二章	序説——貨幣の運動と物価の変動との関係をめぐる岡橋説の批判	五九
I	もんだいの位置づけ	五九
II	物価の変動と流通貨幣量の変動との関係をめぐる問題	六三
III	岡橋教授の物価構造論とその問題点	七〇
IV	むすび	七四
第三章	不換紙幣・不換銀行券の運動と物価の変動——岡橋説の問題点——	九〇
I	問題の領域とねらいの焦点	九〇
II	不換紙幣と不換銀行券——「運動における同一性」にかんする岡橋説——	一〇五
III	不換紙幣の運動と物価の変動	一一二
IV	不換銀行券の運動と物価の変動	一二三
1	不換紙幣・不換銀行券の、「運動における同一性」の思考と「本質における差別性」の思考との矛盾	一二三
2	「銀行券流通の諸法則」にかんする岡橋説の最終結論とその結末	一三三
3	岡橋教授の「実証的分析」	一三九
A	批判の前提	一四〇

B 内在的批判……………二四〇

C 超越的批判……………二五一

V おわりに……………二六

第二部 不換銀行券の伸縮性……………二七

第一章 不換銀行券の伸縮運動にかんする問題点——序説 問題点のありか……………二七

I 還流と伸縮運動——第一の問題点……………二七

II 「蓄蔵」と伸縮運動——第二の問題点……………二八

III むすびに代えて……………二九

第二章 不換銀行券の運動のとらえかた——諸家の方法における三難点……………二九

I ま え お き……………二九

II 理論と現実との関係……………二九

III 本質論と運動論との関係……………二九

IV 運動論そのものの理解のしかた——段階的把握について……………三〇

V む す び……………三〇

第三章 不換銀行券の運動にかんする論争問題——伸縮性の問題をめぐって……………三一

I はしがき……………三二

II 不換銀行券の「還流」と不換紙幣の「回流」との区別にかんする岡橋説……………三三

1 不換銀行券の運動は不換紙幣の運動とどうちがうのか——岡橋教授の計理分析をみる——……………三五

A 価値表章としての補助貨幣・小額紙幣の運動……………三五

B 補助貨幣・小額紙幣の「回流」とはなにか……………三九

C 「発券銀行のバランス・シート」における資産Ⅱ現金とはなにか……………三九

D 不換銀行券の「還流」と「債務性」とはなにか……………三九

2 不換銀行券の運動は不換紙幣の運動とどうおなじなのか……………三七

3 不換銀行券の運動が不換紙幣の運動とちがうということ、おなじだということとは、
どう関係しあうのか……………三六

III ささごこに——積極的見解への展望——……………三六

第四章 銀行券の二重規定にかんする論争点……………三九

I 問題点……………三九

II 銀行券の貨幣論的規定と信用論的規定……………三八

III 銀行券の擬制的利子つき資本としての規定……………三四

IV 本質と運動との照応関係……………三三

第五章 不換銀行券の二重規定と伸縮性 〈序章〉……………三六五

I 不換銀行券の伸縮運動をめぐる論争——還流運動論と伸縮運動論……………三六五

II 伸縮性究明の方法——還流運動と伸縮運動……………三七七

1 接近の視角……………三七七

2 “げんじつ”の流通過程“(W—G—W, G—W—G)”と“独特な流通過程”(G—[……]—G)……………三七九

A 貨幣の流通と資本の還流……………三八三

B 機能資本の還流と利子つき資本の還流……………三八六

3 伸縮性の貨幣論的視点……………三九二

4 伸縮性の信用論的視点……………三九七

5 伸縮性の両視点のあいだの関係……………四〇一

III のこされた課題……………四〇八

第六章 不換紙幣の伸縮と不換銀行券の伸縮——同一性と差異性……………四一三

I 不換紙幣と不換銀行券との同一性と差異性——問題点……………四二三

II 非伸縮・伸縮運動における同一性と差異性……………四三〇

III まとめ……………四四〇

5 目次
あとがき……………四四七

第一部 不換銀行券の運動と物価の変動

第一章 不換銀行券と物価との経済関係

——不換銀行券論争を顧みて——

はじめに

現代の通貨形態として知られる不換銀行券は、どういふ本質の貨幣代用物（代用貨幣）なのか、どんな運動をし、現代の——不換銀行券流通下の——物価とどう関係するのか。といった抽象的・理論的な諸構想をめぐって、マルクス経済学研究者のあいだで論争がはじまってからはや二十数年もすぎさった。

戦前・中・後にわたった華やかなインフレーション論争とは比ぶべくもなからうが、不換銀行券論争は、結果的にみれば、まさにそれを受けつゞ現代インフレーション論争のひとつともいえようか。ところが、不換銀行券論争がはたしてどれだけの学問的進展に寄与してきたかということになると、世評はさまざまで、**「不毛」**・**「無意味」**だ！という罵声さえもがまま聞かれる。なぜか。

おなじマルクス学派立地の論争だけに、見解の対立点が、マルクス原典の抽象的、しかも細密な解釈論や展開論にかかわるところから、部外者には通じにくく、さも、おなじことを互いに**「ちがう！」**と、いがみ合っている**「かのように、みえるのではないか。だが、そうとばかりもいえない。おなじ学派に属しながら、論争点が妙に遠くはなれすぎてゐるばあいもある。そこで、どちらの見解が正しいかの客観的判定を困難にしているのかも知れない。論争の**

核心にかんするつぎの一例がそうだろう。

一方が、「本質論から運動論を説こう」とするのにならして、他方は、そんなことには眼もくれず、逆に「運動論から本質論を導きだそう」と試みる。一方が、二つのものの「本質がおなじなら、運動もおなじだ」、本質がちがえば、運動もちがう」とみるのにならして、他方は、そのうえにまた、二つのものの「本質がおなじでも、運動はちがう」、本質はちがっても、運動はおなじだ」ともいう⁽¹⁾。こうして、両見解のくいちがいはさいしょから大きく、論争がすすむにつれて、立場の相違はいよいよひろがる。それとともに、双方の構想はたがいにますます理解しがたくのみこみにくいものとなる。そこで、不換銀行券論争の正確な把握もむずかしいようにみえよう。

(1) 飯田繁『兌換銀行券と不換銀行券』三二五—九ページ参照。

しかし、論争の焦点は要約すると、しごくかんたんだ。不換銀行券の本質は、貨幣論的視点と資本論・信用論（銀行信用論・金融論）的視点との両面からとらえられなければならない。それは、不換紙幣の本質がほんらい貨幣論的視点だけから価値表章性としてしかとらえられなかったのと、まさに好対照である。不換銀行券の、ひとつの貨幣論的視点からみた本質は、兌換銀行券＝信用貨幣性の否定（全面否定）としての価値表章性（わかり易い表現としてこれまでよく用いられたのが、不換紙幣性）であり、もうひとつの信用論・資本論的視点からみた本質は、擬制的（それじたい価値物ではないという意味で）利子つき資本性である。不換銀行券は、一面では、貨幣論的本質規定＝価値表章性にもとづいて、「げんじつの流通過程」で貨幣論的運動規定＝紙幣流通の独自の「一法則」の支配をうけるのだし、他面では、信用論的本質規定＝擬制的利子つき資本性に根ざして、「独特な流通過程」で信用論的運動規定＝利子つき資本の価値増殖・還流運動法則の支配にしたがう。

ところで、不換銀行券をその先行形態としての兌換銀行券と対比してみると、両者の異同がはっきりとあらわれる。貨幣論的本質規定では価値表章性を、そしてまた信用論的本質規定では擬制的利子つき資本性をもつ不換銀行券は、貨幣論的運動規定では信用貨幣性の兌換銀行券とはちがって、「紙幣流通の独自の「一法則」の支配をうけるのになら

し、信用論的運動規定では擬制的利子つき資本性の兌換銀行券とおなじく、利子つき資本の価値増殖・還流運動法則の支配にしたがう。不換銀行券が兌換銀行券の本質・運動での否定要因としてあらわれることになったのは、信用論的規定においてではなく、貨幣論的規定においてだ、ということがここに明示されている。つまり、不換銀行券が兌換銀行券とはちがうものとされるのは、信用貨幣性を否定する価値表章性のなかにある。

では、なぜ・どこから不換銀行券⇨信用貨幣説が提唱されることになったのだろうか。不換銀行券と兌換銀行券との、擬制的利子つき資本性としての還流運動での「同一性」から。「げんじつの流通過程」での商品・貨幣の運動と、「独特な流通過程」での利子つき資本の運動との差異認識の欠如から。さかのぼっては、不換銀行券⇨信用貨幣論者の、「げんじつの流通過程」での、「貨幣流通の諸法則」と「紙幣流通の独自の一法則」にたいする解釈・理解の方法に大きな問題点がみられる。そうであるいじょう、不換銀行券⇨信用貨幣説の本質・運動構想をただすためには、その本源にさかのぼってその問題点を追究しなければならないことになる。

それはさておき、ここで問題としている、不換銀行券と物価との経済関係は、貨幣論的段階に（資本論的段階に、ではなく）ある。なぜならば、物価の変動は、商品価値の形成・増殖過程、つまり生産過程をのぞけば、商品価値・価格の貨幣量への転化過程・「げんじつの流通過程」のなかで実現されるのだから。資本の形態に転化した貨幣・商品（貨幣資本・商品資本）も、「げんじつの流通過程」のなかでは「たんなる貨幣」・「たんなる商品」として——資本として、ではなく——あらわれ・機能する。もっとも、資本主義社会の「げんじつの流通過程」で「たんなる貨幣」・「たんなる商品」としてあらわれ、機能する貨幣資本・商品資本は、単純商品社会の「たんなる貨幣」・「たんなる商品」とはぜんぜん比べようもない質的な多様・差異性をもつではあるが。それでもなお、現代通貨の不換銀行券が価値表章としてあらわれ・機能するのは、ちょうどかつての兌換銀行券が信用貨幣としての本質をもち、機能したのとおなじく、「げんじつの流通過程」のなかでだ。

現代インフレ現象が不換銀行券の価値表章性にもついで発生するのも、ちょうど古典インフレ現象がかつて不換

紙幣の価値表章性に根ざしておこつたのとおなじように、「げんじつの流通過程」のなかでだ。現代インフレだからといって、資本の増殖・還流過程（銀行信用・「独特な流通過程」・利子つき資本の流通過程をふくむ）のなかで、「資本インフレ」、たとえば「信用インフレ」などの現象が発生するわけではない。インフレ現象は、古典であろうと・現代であろうと、「貨幣流通の諸法則」によって規定される流通必要量を基盤とし、それを額面のうえてこえる価値表章（金や信用貨幣ではなく）総量の増発にもとづいておこるのだから。ここに、インフレーションの「貨幣性」（「価値表章性」——いわゆるインフレーションの「資本性」や「信用貨幣性」ではなく——がみられる。

よく知られているように、流通必要量の額面・ワクをこえて発行・投入され、流通する価値表章総量がどんなに多くても、流通必要量をしか代表できないという「紙幣流通の独自の一法則」に支配されることによって、単位あたり価値表章の代表金量（事実上の価格標準）は低下し、事実上の貨幣名・価格名（↓物価）は一般的・名目的に上昇する。このことは、しかしながら、古典・現代インフレの本質規定に共通する究極論（in the long run theory）の核心・骨組みにはかならない。そのインフレ程度が小規模・短期的であるか、大規模・長期的であるかどうかで、その究極論の内容はだいたいそのままいけるか、それとも大きくモディファイされるか、のちがいが生じることにものなる。インフレーションは、ただ物価の一律・名目的な上昇をもたらすだけで、実質的な物価変動（景気・格差変動）とはまったく無縁なものであるかのように単純視する人がいるようだ。インフレーションの本質論・抽象論についてはまさにそのとおりだが、インフレーションの現象論・具体論はそうした単純なものではない。

インフレ発生の基礎的前提としての流通必要量それじたいが、事前のさまざまな実質的物価変動で決定されている。その実質的な物価変動が、価値表章の増量によって事実上の価格標準の切り下げ・貨幣名の切り上げの影響を名目的にうけるとしても、げんに流通必要量をほんらい決定している諸物価変動要因じたいはいちおうそのまま実質的に作用しつづけているはずだ。物価変動の実質性はインフレ現象によって消え去るのではない。ただ、実質的物価変動のうえにインフレの名目的な被い（ベール）がかぶさるだけのことだ。しかし、商品別分野に投下される価値表

章量のちがひによって、その被いに濃淡の格差が生じるとなれば、実質的な物価変動と名目的な物価変動との重なり合い・絡み合いはいちだんと複雑・多岐となる。こうして、インフレの具体的な影響は多面化され、はかり知れない生産性の格差、価値・所得の再分配現象をひきおこすことになる。

ところで、インフレーションのそうした現象論・具体論にはいるまえに、まず要請されるインフレーションの本質論・抽象論を説明する段階ではやくも上述のような諸点にかんする対立論が生じている。これに正しい道をきりひらくためには、不換銀行券の価値表章性（二重性のなかの一面）を明らかにしなければならぬ。不換銀行券の貨幣論的本質が信用貨幣性ではなく、価値表章性にあるからこそ——信用論の本質は擬制的利子つき資本性にあるとしても——、現代インフレの発生可能性（発生必然性ではなく）を内包している。現代インフレ可能性をもたない兌換銀行券の二重性——貨幣論の本質規定↓運動規定としての信用貨幣性と、信用論・銀行信用論の本質規定↓運動規定としての擬制的利子つき資本性——とはちがう二重性を、なぜ不換銀行券がもつことになったのか。これについては、これまでくりかえし諸論稿で説いたが、いま不換銀行券論争を念頭におきながら、貨幣論的基礎段階から要約的に説きおこしてみよう。

(2) 『現代銀行券の基礎理論』、『兌換銀行券と不換銀行券』、『インフレーションの理論』、『マルクス紙幣理論の体系』、『商品と貨幣と資本』、『マルクス貨幣理論の研究』、『貨幣・物価の経済理論』に収録。

I 貨幣と物価との因果関係

「不換銀行券と物価との経済関係」の基礎には、「貨幣と物価との経済関係」が存在している。「貨幣と物価との経済関係」がしっかりと把握されるのでなければ、「不換銀行券と物価との経済関係」どころか、それに先行する「兌換銀行券と物価との経済関係」や「不換紙幣と物価との経済関係」さえもつかめない。ところで、基盤となるその